ブルーストとベケット[1]

ブルーストの“Postérité”としてのベケット[2]

井上奈緒美

はじめに

サミュエル・ベケット(1906-1989)の批評『ブルースト[3]』(1931)の存在がなければ、両者の関係は今ほど問題にされることはなかったであろう。ジェイムズ・ノールソンの伝記を読めば、この批評書の構想が一夏で成ったものではなく、周到な準備のもとに書かれようとしていたことがわかる。ベケットは、『ブルースト』執筆にかかる前々年の1928年に、英語の講師としてパリ高等師範学校に派遣されており、ギュスターヴ・ランソンの後を継いだ高等師範学校のブグレ教授に、学位論文としてブルーストとジョイスの作品を主題にしたいと述べているのである。しかし、フランスでは物故して評価が落ち着いた作家を主題に選ぶことが普通であり、ブグレ教授は、生きているジョイス(1882-1941)は言うに及ばず、せいぜい亡くなって8年しか経っていないブルースト(1871-1922)を学位論文の主題に選ぶことを思いとどまらせたようである[4]。この時すでにベケットは、ジョイスの依頼により、「進行中の作品」と称されていた『フィネガンズ・ウェイク』について「ダンテ...ブルーノ.ヴィーコ..ジョイス」(1929)を執筆していた。そしてジョイス論の翌年の1930年夏にベケットは『ブルースト』(1931)を脱稿するのである。また、1934年には初のブルーストの生成研究の書評[5]を引き受けてもいる。この経緯からも明らかなように、ベケットは、検討すべき文学としてジョイスとともにブルーストを考えていたのであり、ベケットにおける文学的遺産は、ジョイスと共にブルースト作品が

重要な場を占めることになる。

1　ベケットの同一性批判

ベケットは『失われた時』が彼自身愛読していたロマン派の哲学者ショーペンハウアーの絶大な影響下に書かれたと読んでいる。アンヌ・アンリはこれにシェリングを加えている[6]。シェリングとショーペンハウアーは、主・客両方の同一性をなす第三の絶対者を最初の出発点としている点、世界のあらゆる事物をその絶対者の客体と見、すべてに類似性を見出し、同一性を論じていく点において酷似している。しかしシェリングは、フィヒテの自我哲学を批判的に受け継ぎ、自我内部の自己意識の確立の過程に、先験的な過去であり、無意識的な能産的自然による関与を組み込んでいる点で、自我と自然とのパラレルな関係が強調される。主・客の同一性は、意識的な自我と無意識的な自然の合一によって成就されるのである。シェリングは、絶対者が自我と非我（自然）に分岐し、再び同一性を回復するロマン派的精神のオデュッセーに芸術創造のプロセスを見る典型的な思想家であろう。だが、シェリングは自我と非我との合一を説いただけではなく、ヘーゲルなどとは異なりその哲学の根底に“l'inquiétude”「不安」を持つ[7]。フロイトやユングを含む力道的精神医学を育んだ文化的背景として、シェリングを初めロマン派の大きな影響が語られるのも[8]、無意識や夢、自我と非我（自然）、あるいは自己と他者の関係が本質的な問題として考察されたからに他ならない。シェリングの哲学に、さんざしやユディメニルの樹木など自然の事物が深く関係している『失われた時』の無意志的記憶の雛形を見ることは容易であるが、重要なことはむしろ、なぜプルーストが自我と非我との合一を説く哲学を必要としたかという問いであろう。

このプルーストの無意志的記憶に対するベケットの反応は両義的である。無意志的記憶が主題となる『失われた時』の「心情の間歇」では、過去にとった同じ身体的動作を契機に、亡くなった祖母の顔がまざまざと浮かび、主人公に初めて祖母の死を実感させる。ベケットはこの場面はよく書けていると述べて

いる。しかし、『失われた時』の大団円における啓示の場面についてはあまりにも予定調和的な同一化を批判する。この共感と批判が相半ばしている傾向は、『プルースト』執筆の2年後に書かれた初の長編小説『並には勝る女たちの夢』(死後出版1992)にもっともよく現れている。プルーストにとっての植物的イメージの重要性は『プルースト』でも強調されているが、今日プルーストの換称(antonomase. 固有名詞の代わりに普通名詞を用いること。またその逆も言う)ともいえるさんざし[9]を、ベケットはこの小説の第一ページ、自転車に乗った主人公がスピードをあげて走る道沿いの垣根に登場させている。プルーストの主人公はさんざしの垣根沿いを徒歩で通る。プルーストとは違う時代の小説を書こうとするベケットの息づかいが感じられる冒頭である。また、この小説は精神的愛と肉体の愛が自己のうちでうまく融合しない主人公の物語でもあるが、この自我と自然の不一致は、主人公と、緑の目を持ち草木に喩えられる恋人、スメラルディーナ=リーマとの交接の不快として描かれる。無意志的記憶の想起の場面でも、プルーストの「至福」に対して、ベケットは「不快」を表明する。『モロイ』の次の場面においてはプルーストの無意志的記憶に対する共感と批判が共存している。

> 白いさんざしがおれのほうへ垂れかかっていたが、残念ながらおれはさんざしの匂いが嫌いだ。溝の中には草がびっしりと深く茂っていたので、帽子をぬいで、葉の茂った長い茎を顔のまわりに引き寄せた。すると大地の匂いがした、大地の匂いが草の中にあったんだ、その草を両手で顔の上に編み重ねたので、何も見えなくなった。少しは草も食べてみた。ふと記憶によみがえったのは、さっきの自分の名前と同じくらいわけのわからない思い出し方だが、いま暮れようとしているその日の朝、おれはおふくろに会いに出かけたのだということだ[10]。

この場面で「さんざし」をプルーストの無意志的記憶の換称と解することは唐突ではないだろう。これはプルースト（さんざし）とは異なる方法、つまり、固有の名前を持たない草によって記憶を問題にすると述べているように見える。プルーストの主人公が死んだ祖母の思い出に涙にくれるのとは異なり、モロイの母親も死んでいるらしいのだが、上述のさんざしが問題になる場面では，自分は生きているのだと思っている母の所へ行くのだと淡々とした調子で語られるだけで、自己を記憶に全面的にゆだねることはない。ベケットはプルーストが描いた肉親との関係の問題の根を意識的に露呈させる方向へと向かい、他者の存在をどのように受けとめるかという問題として一層深化させていく。そして、この他者との関係が、植物 - 自然を媒介にしていることは、プルーストを継承、批判しているというにとどまらない問題を孕んでいる。

ベケットの初期作品には「青い花」という言葉が時折現れ[11]、後には直観批判も行われるようになる。『メルシエとカミエ』（1946年執筆、1970年刊行）の主人公たちの名（Mercier, Camier）はアナグラムになっており、ロマン派の主題の一つである分身[12]をテーマにしている。第7章では二人の話した事柄が要約されており、その6番目に「直観は多くの気違い沙汰を行わせる[13]。」とある。言うまでもなく、「青い花」は、ロマン派の詩人ノヴァーリス（1772-1801）の『ハインリヒ・フォン・オフターディンゲン』（1802）の換称であり、直観[14]とは、自我と非我を統合するロマン派哲学の重要概念であろう。まさしくベケットは、ロマン派の枠組みを継承しながら、同時にそのロマン派批判を行っているのである。マーガレット・マインはプルーストにおけるノヴァーリスの影響の主要なものとして、真の現実は自己のうちに見出されるという“Verinnerlichung”「内面化」の要素を提示し、プルーストにおいては、芸術の媒介によって他者へと開かれる精神の風景がこの内面化を示すものだとしている[15]。1908年のフランスでの『ハインリッヒ・フォン・オフターディンゲン』の刊行当時は、まだノヴァーリスの哲学研究の詳細なノートは刊行されておらず、その受容は、今日よりも一層、亡くなった婚約者ゾフィー・フォン・

キューンの死によって啓示を受けた哲学詩人の側面が強調されている。つまり、各部分が幾重にも照応し合い、懐かしく不思議な雰囲気を醸し出す作中の「精神の風景」の中心には愛によって融合すべき他者としての死者がいるのである。話に聞いた青い花に促され旅をする主人公は、美しい少女と出会い愛し合うが、少女の死により再び旅の途につく。この主人公を導く青い花に、ミューズとしてのソフィーの面影が濃厚に立ちこめている。植物 - 自然に化した死者は、『失われた時』の中でも、マドレーヌ体験の前に置かれたケルト人の信仰を語る件やユディメニルの樹木に顕著に見られる[16]。ブルーストは、ベケットがその批評で指摘したように、ロマン派的傾向を多分に持っていた。

ベケットが『メルシエとカミエ』で本格的に直観批判を行うのが、戦争直後の1946年という年であることは注意を引く。ブルーストのノヴァーリス受容の頃と同様、ベケットのそれも、大戦間近のナショナリズムが高揚した時期にあたる[17]。ナショナリズムとロマン主義の機運が期を一にすることは周知の事実であろう。ベケットの直観 - 同一性批判は、ブルースト作品の継承 - 批判と同様、耽溺したからこその批判であるが、ナショナリズムと結びついたロマン主義批判の側面を抜きにしては語れない。ブルーストが『失われた時』で、ドレフュス事件を話題にしながら、一見作者の態度を留保しているかのように描いているのとは別の形で、ベケットは「事件」を話題にすることなく、それに関わる事象を換称などで示し、また批判する対象そのものを枠組みに用いるといったレトリックを大いに行使しながら批判することにより「事件」の核心を問題にするである。

2 新しい空間の誕生 --- 声 - 同一性の硬直を破るもの

そもそもベケットは同一性そのものを最初から問題にしていた。「危険なのは、あれこれの同一性を整然と腑分けすることだ。The danger is in the neatness of identifications.」「ダンテ・・・ブルーノ・ヴィーコ・・ジョイス」(1929)の冒頭である[18]。そこでベケットは、ヴィーコを評価しながらも、

文化的発展段階に言語的発展をぴったり対応させることは硬直した相互排除性を招くと批判するが、ブルーノの反対命題の一致には肯定的である。それは最大と最小を一なるものと見ることであり、そこには最大の崩壊と最小の発生の一致に見られるような生成消滅、運動が孕まれる。ベケットの登場人物や事物も同一性を与えられるや、それが否定されることで同一性がずらされ、新たな相を生む。この反対命題の一致が徹底され、驚嘆すべき展開を見せるのは『モロイ』以降、作品が生み出される度に、肉体の崩壊の亢進過程と平行して精神内部が拡大してゆき、声の数多性が生まれる過程である。『名づけえぬもの』(1953)では、複数の声の乱反射が「私」という強固な一人称を崩壊させる。

ベケットはこの反対命題の一致を基盤に、プルーストを凌ぐ文学を築こうとしたかに見える。『夢』の中の「僕は本を書くぞ」で始まる一節にそのマニフェストが記されている。

> 僕の読者の経験は、語句と語句の間に、つまり叙述の項ではなく叙述の間隙によって伝達される沈黙のなかに生じることになるだろう。それは共存できない花々の間、単語の対立的な（略）季節の間に生じる。（略）もっとましな人間がめまいのときの蝶をぴかぴかきらめかせたのよりももっと完璧に沈黙を叙述するぞ[19]。

「めまいのときの蝶」の場面とは、『失われた時』で作家ベルゴットがフェルメールの絵を前にして死ぬ有名な場面であろう。「デルフトの眺望」の黄色い小さな壁面が永遠の芸術作品の象徴として作家の前に現れる。昏倒直前、彼は子供が黄色い蝶をつかまえようとする時のように黄色い壁面を凝視し、「こんな風に書くべきだった[20]」と言う。ベケットが捉えているのは無意志的記憶と対になってプルースト芸術の根幹を成している方法論、隠喩である。異なる二つのものの間に思いがけない類似を見出す隠喩を用い、ここでは子供が蝶を

つかまえようとする姿に芸術家が永遠の作品を追い求める姿を重ねているのである。ベルゴットの姿には死に直面していたプルースト自身の姿も重ねられていたことであろう。ベケットは『夢』の別の箇所で、プルーストを暗示するマルセル・P（P・マルセルと解すことも可能である）と思われる人物の文体を「言葉の宙返りloopings verbaux[21]」と批判するが、この《loopings》という語自体、プルーストが生きていた当時は新語であり、プルーストはこれをジョットーの絵の中の「天使たち」と、ギャロスの生徒たち（パイロット）すなわち飛行機の宙返りを比喩で結ぶ語として用いている[22]。異なる二つのものを重ね合わせ、同一化することに文体の力を見たプルーストに、ベケットは絶対的自己同一性を与えず言葉を対立させ、炸裂する言語空間の沈黙によって挑むのだ。指示されはするが完全な沈黙を守るこの空間を、ベケットは後に声の数多性の領野で展開し精緻化してゆく。

1943年、ルイ・マルタン＝ショフィエは『失われた時』の語り手、主人公、作者、生身のプルーストの四人を区別し、特に語り手に焦点をあて、複数の「私」の構造分析を試みる[23]。ベケットにおける声の数多性が極まるのも、すでに見たように40年代後半に書かれた小説三部作においてである。1959年には鈴木道彦が「無名の一人称」を発表し、現在まで世界的に広く認められることになる語り手「私」の無名性を確立する。決定稿で二度現れるマルセルという語り手の名が、プルーストが死なずに修正の手を加えればいずれは消える運命にあったことを草稿を綿密に調査した上で導き出し、プルーストの読書論と作品原理を考察しながら、無名の「私」の創造は、多くの「私」につながるものであり、多くの他者 - 読者が、作品と出会い、そこに自己を読み取るためには必要不可欠なものであったと論じている[24]。複数の「私」を読みとる見方は、この後1965年のマルセル・ミュレール、そして、72年のジェラール・ジュネットも同様である[25]。『失われた時』は熟慮の末、語り手＝主人公の一人称が選択され、この一元化により諸審級を横断し、他者の「声」をも吸収する多くの「声」が獲得されたのである。

『失われた時』はこの複数の声をもつ「私」が闇の中で眠れずに輾転するところから始まる。似たような設定をもつベケットの『伴侶』(1980)は「ある声が闇の中にいるだれかに届く。想像せよ[26]。」という一節で始まる。許される人称は二人称と三人称で、「おまえ」の使用により「私」の存在を予感させはするが、「私」という一人称は与えられない[27]。冒頭部分で「彼」にも「おまえ」にも一人称の役割はできないという命題が立てられ、「彼」や「おまえ」と呼ばれている者、さらには語り手をも含めた複数の存在が循環し名指されはするが、それはまるで「私」の頭脳の中ででもあるかのように名づけられることのない「私」を指示しようとする。しかし、いかなる声も「私」に同一化することはなく「私」は忌避されるのである。

ベケットは人称においても安易な同一化を拒否し、命名され得ぬ「私」を描くことによって他者と「私」の関係を照射しているといえよう。『名づけえぬもの』で行われた「私」という一人称の崩壊、そして『伴侶』で描かれる指示されるだけの「私」の存在は、自我の存在基盤のもろさを示すだけではなく、他者から要請される自己同一性への拒否を示すものともなっている。

3　換称 --- 「ダンテ...ブルーノ.ヴィーコ..ジョイス」における政治

多層の同一化を行うプルーストと、まさにその点を空無に置いたベケット。この態度の違いの根底に、フランスという生国で反ユダヤ主義が吹き荒れた時代に半ユダヤ人の生を送ったプルーストと、フランスから逃れてきたユグノーの家系をもち[28]、祖国アイルランドを脱し再び流浪の道を選んだアングロ・アイリッシュとしてのベケットの生の違いを見ることはけっして無駄なことではないだろう。プルーストが行う同一化の試みは、相互排除的な思想からはもっとも遠いところにある。そもそもユダヤ人にとって相互排除的な雰囲気はその土地での生活を困難にさせるだけであろう。プルーストは一貫してドレフュス主義者であったが、ユダヤ人についての描写は草稿から決定稿に進むほど曖昧なものとなっていく。それは、フランスのユダヤ人の同化の状況、また明白な

無実の証拠がありながらドレフュス事件が、シャルル・ペギーが書いたように「曖昧な敗北」を喫してしまう状況とけっして無関係ではあり得ない。戦時下の抵抗文学がレトリックを必要としたように、ドレフュス事件を扱う文学にもそれが必要であった。『失われた時』では、ユダヤ人スワンが、ドレフュス派であることを明らかにしたことによって貴族街フォブール・サン-ジェルマンを追われる。それがプルーストにとっての、そしておそらくプルーストが生きた時代にとっての「現実」だったのである。

ベケットがプルーストから学んだ最良のものの一つはこのプルーストの陰影に富んだレトリックであったかもしれない。アイルランドではアイリッシュと支配層を形成するアングロ・アイリッシュとの民族的対立を下敷きに、カトリックとプロテスタントの激しい抗争が繰り返されてきた。対立がうむ硬直した検閲制度によって、ベケットの小説も『蹴り損の刺もうけ』が1934年に、『ワット』が54年に、そして『モロイ』が56年にアイルランドで発禁になっている。ベケットは、すでに「ダンテ...ブルーノ．ヴィーコ..ジョイス」の最後に置いたジョイスとダンテを比較する箇所で、両者が教会から受けた「非難の嵐」について述べている。ベケットは、ダンテが受けた焚書を語りながら、当時のアイルランドの検閲制度を批判しているのである。それは次の一文に明瞭であろう。「彼［ダンテ］の『俗語論』を読むと、完全に彼が市民的不寛容からまぬがれていることにわれわれは心を打たれる。彼は世界におけるポートダウン（北アイルランドの地方都市）人を攻撃するのだ[29]。」

初期作品にはすべてがある、批評の座右の銘ともいうべきこの言葉を証明するように、多くの研究者が「ダンテ...ブルーノヴィーコ..ジョイス」に触れて、「形式は内容であり、内容は形式である[30]」というベケットの言葉を引用している。では、このジョイスについての論考の形式と内容とはいったい何であろうか。ベケットはヴィーコの詩学を論じる箇所で“the Type-names”についてかなりのページを割いている。ベケットによれば、“the Type-names”とは、たとえばギリシアの英雄アキレスにちなんで一般的な英雄を命名するごとく、

典型の名によって大勢の個人の呼称を決定する言語の形式である。これはすでに、さんざしや青い花に関して論じてきた換称と同一の文彩である。ベケットは、『フィネガンズ・ウエイク』に登場するブルーノにちなむ典型名まで教えてくれている。では、タイトルの「ダンテ...ブルーノ.ヴィーコ..ジョイス」のこの４人の名は何を意味しているのだろうか。各人名間の点の数は、各人物を隔てるおよその世紀数だという。４人のうち、ヴィーコを除いて、ダンテ、ブルーノ、ジョイスの３人にすると、共通点は故郷を追われた追放者である。ベケットは、ヴィーコが密かにブルーノを応用し、そしてジョイスがヴィーコを援用して『フィネガンズ・ウエイク』を書いていることを示した上で、最後にダンテとジョイスの状況の共通点を探るという構成を組んだ。ヴィーコはブルーノとジョイスをつなぐ媒介項であり、ダンテとジョイスの比較は、そこで問題になっているのが「悪循環」であるだけに国外追放者の円環的進化を描き出しているとも言える。典型名を初め、数字の４と３の重要性、円環的進化、そして権力当局による迫害はいずれも、ベケットがこの論考の中で論じているものなのである。この論考の最後は、“And the partially purgatorial agent? The partially purged[31]”「そして、半端に煉獄的な作動者は？　半端に（不公平に）粛正される（浄化される）者」という問いと答えで終わっている。これは、煉獄“purgatory”に対するダンテとジョイスの比較を述べた最後にくる言葉であり、ベケットが自問した問いと答えでもあったであろう。なぜなら、ベケットはこの後、実際にアイルランドを離れ、煉獄状態、あるいはそれと等価の中間性[32]を作品創造の基本的原理としていくからである。ベケットの同一性批判の根には、どちらかの陣営に与することを強いられるアイルランドの政治状況への批判があったことは疑えない。しかし、それは語られずに問題にされるのである。

プルーストは「読書について」と題した批評の中で「作者の叡智が終わるところから私たちの叡智が始まる[33]」と書いた。プルーストの「後裔」ベケットの文学的実践はこのことをもっともよく証立てているといえよう。

注

(1) 本稿は高橋康也監修『ベケット大全』、白水社（1999）所収「プルースト」の項執筆のために同書編集委員会に提出した三種類の原稿をもとに書き改めたものである。本稿の論旨は1997年10月に編集委員の方々に読んでいただいたものと変わっていないが、ノヴァーリス、典型名、検閲の問題などに関しては今回新たに書き加えた。目を通して下さった編集委員の諸先生方にお礼申し上げる。

(2) 1999年11月20日のアントワーヌ・コンパニョンの講演では、セリーヌ、サルトル、ベケットがアンチ・プルーストの"postérité"として位置づけられていた。なお、この講演は、パリの新国立図書館で、プレヤード版の編者ジャン＝イヴ・タディエ監修の下に開催された"Marcel Proust, l'écriture et les arts"と題された展覧会の一環であった。

(3) Samuel Beckett, *Proust*, London, Chatto and Windus, coll.«The Dolphin Books», 1931 ; trad. et éd. Edith Fournier, Paris, Les Éditions de Minuit, 1990.

(4) James Knowlson, *Beckett*, trad. Oristelle Bonis, Actes Sud, 1999, p. 149.

(5) Albert Feuillerat, *Comment Marcel Proust a composé son roman*, New Haven, Yale University Press, 1934 ; Genève, Slatkine, 1972 ; Samuel Beckett, « Proust in pieces », *Spectator*, june 1934.

(6) Anne Henry, *Marcel Proust: théories pour une esthétique*, Klincksick, 1981.

(7) Philippe Grosos, *Système et subjectivité : l'enjeu de la question du système. Fichte, Hegel, Schelling*, Paris, Vrin, 1996.

(8) 今泉文子、「無意識の発見」、『鏡の中のロマン主義』、勁草書房、1989年。「無意識の発見」の章は、ロマン主義と力道的精神医学の関わりについて割かれている。

(9) Jacques Brosse, *Les arbres de France*, Plon, 1987; Christian de Bartillat, 1990, p. 23.

(10) サミュエル・ベケット、『モロイ』、安藤元雄訳、『筑摩世界文学体系82』、1982, p. 18 ; *Molloy*, Paris, Les Éditions de Minuit, 1951, p. 41-42.

ベケットの作品の翻訳に関しては既訳を掲載させていただいた。引用させていただい

た諸先生方にお礼申し上げる。なお、翻訳文献の後に原典を示した。

(11) Samuel Beckett, "Assumption", *The Complete short prose, 1929-1989*, éd. S.E. Gontarski, New York, 1995, p. 6 ; *Dream of fair to middling women*, ed. Eoin O'Brien and Edith Fournier, Dublin, The Black Cat Press, 1992, p. 214 他。

(12) 同掲書、高橋康也監修『ベケット大全』、「ロマン主義」「他者/分身」を参照。

(13) Samuel Beckett, *Mercier et Camier*, Paris, Les Éditions de Minuit, 1970, p. 117.

(14) たとえば、シェリングの『先験的観念論の体系』(1800)では、自然哲学の完成は、直観と思惟の法則を用い、あらゆる自然法則を完全に精神化することにあると述べられている。F.W.J. Schelling, *Le système de l'idéalisme transcendantal*, trad. et éd. Christian Dubois, Louvain, Éditions Peeters, p. 8, さらに第三章を参照のこと。

(15) Margaret Mein, "Novalis a precursor of Proust", *Comparative Literature*, n° 23, 1971, p. 219-221.

(16) 樹木と死者との関係は、拙論、Autour du mot «transvertébration» dans *À la recherche du temps perdu* : entre la mystique et le rationnel de la langue, 関西学院大学修士論文、1996年でも主要テーマとして取り上げている。フェードルを演じるラ・ベルマがサンゴと化す場面などでも樹木と死者との関係が読み取れるであろう。

(17) ベケットのノヴァーリスとの関わりは、『トランジション』誌を抜きにしては考えられない。この雑誌は、彼が作品を寄せ、また、その批評を書くことになるジョイスの『フィネガンズ・ウエイク』も連載されており、しばしばロマン派およびノヴァーリスに関する論考を掲載していた。Samuel Beckett, «Assumption», *Transition*, n° 16-17, june 1929 ; Novalis, *Hymns to the Nighit, Transition*, n° 18, november 1929.

(18) 「ダンテ...ブルーノ.ヴィーコ..ジョイス」、川口喬一訳、『詩　評論　小品』、白水社、1972, p. 93 ; « Dante... Bruno. Vico.. Joyce», *Our exagmination round his factification for incamination of Work in Progress*, London, Faber and Faber, 1961, p. 3.

(19) 『並には勝る女たちの夢』、田尻芳樹訳、白水社、1995, p. 163. ; *Dream of fair to middling women*, éd. Eion O'Brien et Edith Fournier, Dublin, The Black Cat presse,

1992, p. 137-138.

(20) Marcel Proust, *À la recherche du temps perdu*, éd. Jean-Yves Tadié, Paris, Gallimard, coll.«Bibliothèque de la Pléiade», 4 vol. t. III, p. 692.

(21) 同掲書、p. 20 ; p. 29.

(22) *Op.cit.*, t. IV, p. 227.

(23) Louis Martin-Chauffier, «Proust et le double "Je" de quatre personnes. Le roman de la création d'un monde et l'histoire vraie d'une aventure spirituelle», *Confluences*, 1943.

(24) 鈴木道彦、「無名の一人称」『プルースト論考』、筑摩書房、1985 ; *Bulletin de la société des amis de Marcel Proust et des amis de Combray*, n° 9, 1959.

(25) Marcel Muller, *Les voix narratives dans la Recherche du temps perdu*, Genève, Droz, 1965 ; Gérard Genette, *Figures III*, Éditions du Seuil, coll.«Poétique», 1972.

(26) *Compagnie*, Éditions de Minuit, 1985, p. 7.

(27) 人称については次の論考を参照した。Olga Bernal, *Langage et fiction dans le roman de Beckett*, Gallimard, coll.«Le Chemin», 1969 ; Émile Benveniste, «De la subjectivité dans la langue», *Problème de linguistique générale*, 1, Paris, Gallimard, coll.«Tel», 1990.

(28) Knowlson, *ibid.*, p. 35、およびp. 32を参照のこと。 ベケット自身は、父と母の宗教であり支配層を形成するプロテスタントでもなく、またアイルランドで多数派を占めるカトリックでもなく、母方のクエーカー教徒の末裔をもって任じていたと言う。

(29) 同掲書、p. 92 ; p. 18.

(30) « Dante... Bruno. Vico.. Joyce», *op. cit.*, p. 14.

(31) *Ibid.*, p. 22.

(32) 同掲書、高橋康也監修『ベケット大全』、「反復・中間性」を参照のこと。

(33) Proust, «Sur la lecture», John Ruskin, *Sésame et les Lys* précédé de *Sur la lecture*, trad., notes et préface par Marcel Proust, éd. Antoine Compagnon, Bruxelles, Éditions Complexe, 1987, p. 66.

(博士課程前期課程修了)